

日本向けに箱積みされる塩漬け鮭。



日系移民の役割

ある。日本からニューヨークまで、たった十三日で着いたこともあった。

絹の輸入は、世界大恐慌や合成繊維の開発により、だんだん少なくなり、特別列車は一九三九年を最後に廃止された。しかし、それでも絹貿易はカナダにとって、一般に考えられていたより重要性をもっていた。またカナダ太平洋鉄道会社も、そのおかげで不況を乗り切ることができた。

一八七七年に、長崎県出身の永野萬蔵がブリティッシュ・コロンビアへやって

きた。記録では、日系移民の第一号である。それ以来、多くの日本人がカナダに移住し、日加関係の発展、特にカナダの物品を日本に輸出するに当って、重要な役割をはたした。例えば早くも一八九〇年には、何人かの日系移民が日本と貿易し、またビクトリアとバンクーバーに骨とう店を開いていた。一八九一年には、鉱山で働くため、およそ六十人の日本人労働者がブリティッシュ・コロンビア州カンバーランドに到着した。その年、カナダは四千六百六十四ドル相当の石炭を日本に輸出している。

翌年、バンクーバーに住む日本人が

カナダ小麦をはじめて日本に輸出した。額はわずか三千ドルと小さかったが、小麦はその後、カナダの主要な対日輸出品となった。同じ年、塩漬けにしたしんが輸出され、また一八九六年には日系移民が三百トンの塩漬け鮭を故郷へ送った。塩漬け鮭の輸出は、一九〇六年には七千トン、二十万ドル、塩漬けにしんは五千トン、七万五千ドルに達している。商才に富む日系移民は、また一九〇三年にドイグラスもみ（米松）を大規模に対日輸出した先駆者でもある。日本はその後、カナダ産木材の一大市場となった。

長い間、日本の対加輸出品として最も知られていた

私とカナダ

日加関係への

提言

岩崎力資源経済事務所
(トロント)

岩崎 力

去る十二月の初旬、私の事務所はカナダの大政党の一つであるPC党(保守党)からの短い書簡を受け取った。同党党首クラーク氏一行が訪日するに際して所見あれば開陳あれ、との趣旨である。私の事務所は金属資源やエネルギー資源の国際的な諸問題の海外での研究室の様なもので、日加間の経済貿易問題あるいは知的交流の問題等についてもいくつかの論文を発表したりもしている。そこで、日加間の社会構造の相違(つまりクラーク氏の様な少壮政治家が日本では何故大政の党首になり得ないか、云々)両国間の経済成長差の問題など、七つの項目について私見をまとめたレポートを提出した。この中で私が特に重点をおいたのは下記の三点であった。

(一)日本におけるカナダという国のイメージの問題

この問題は前に、「カナダは新しい国か」という私の小論でもふれたことがあるが、日本で知られているカナダという国のイメージはいささかしいことづくめで逆効果を生んでいる面もある。つまり、一方では限らない森と湖とロッキーマウンテンという美しい自然のイメージがあり、他方では高

度の経済社会と生活水準、加えて建国以来百余年の「新しい国」であり、かつまた、国際舞台では自由な外交姿勢と南北問題のリーダーとして知られる。おそろしく、現在の世界諸国の中でカナダほど立派なナショナル・イメージが日本で宣伝されている国はあまりないのではないだろうか。

多くの男性があまり完璧な女性にやもすると親近感を持てないのと同様に、あまり上等なナショナル・イメージは二国間関係において一種の心理的な反発をまねきかねない。先進国たる後進国たるを問わず、どの国もその国なりのアゴニー(苦悩)がある。経済的な成功をもってはやされた日本にも当然さまざまな苦悩はある。カナダにも現行の連邦制度の基本的な諸問題、長い歴史的背景をもつ英仏両系人の確執、少数民族の諸問題、世界一の借金国となった悩み等々、さまざまなアゴニーがある。おたがいにその苦悩をぶちまけてこそ、真に親近感のある二国間関係ができればいいのではないのか。

(二)「国際性」についての認識

私の判断では北米の一部の人々よりもどうやら日本人の方が広い意味での国際性を持っているように見受けられる時代になった。これはどちらがすぐれているということではなく、豊かな北米の一部では外国のことなどどうでもよかったという過去を反省して必要があるということであろう。日本人が国際性を持ちはじめ